



Title	都市のアソシエーションによって生み出される共同性 ータイ国北部チェンマイにおけるタイヤイの若者に着 目してー
Author(s)	朴, 苑善
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105492
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認した ため、全文に代えてその内容の要約を公開していま す。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 朴 苑 善 ）

論文題名

都市のアソシエーションによって生み出される共同性
ータイ国北部チェンマイにおけるタイヤイの若者に着目してー

論文内容の要旨

本稿は、タイ国北部の都市チェンマイに居住するタイヤイの若者に着目し、都市という移住先において移民の共同性がどのように生み出されるのかを明らかにすることを目的とする。タイヤイとは、主にミャンマー連邦共和国のシャン州を中心に、中国雲南省西部、タイ国北部、ラオス北部の国境地域に分布するタイ（Tai）系民族集団を指す。本研究対象は、先行研究の中で主に2つの視点から論じられてきた。第一に、タイ国内における少数民族でありながら、タイ（Thai）と同じタイ系民族として両者を「キョウダイ」とする語りに基づく視点であり、第二に、タイヤイがミャンマーとタイ国のいずれにも属さない独立した民族であることを強調する「自主独立」の語りに基づく視点である。これらの研究は主に仏教儀礼や祭りを題材とし、必ずしもその主眼が彼らの民族的共同性の維持を論じることではないものの、タイ国内に居住するタイヤイを、シャン州出身者による一体的で同質的な共同体として捉える傾向があった。近年では、都市部に居住する若者の実践的な活動に焦点を当てた研究も見られるが、特定の移民世代に限った議論にとどまり、都市という多層的な場の特性や内部の多様性の中から共同性が立ち上がる過程は十分に検討されてこなかった。これらを踏まえ、本稿では、所与の民族のカテゴリーや地縁に基づく固定的なアイデンティティを前提とする共同体像ではなく、都市で生活する若者たちがアソシエーションという日常実践を通じて主体的に関係を築く過程に着目し、そこから生み出される共同性と、その生成過程に焦点を当てた。

研究方法として、タイヤイの移住の歴史や法的・社会的な位置づけ、さらに移住先で行われる年中行事や教育・学習に関する文献調査を行い、調査対象の社会的・文化的文脈を把握した。その上で、2022年から2024年にかけて約1年3か月間、チェンマイ県チェンマイ市に滞在し、参与観察とインタビュー調査を行った。具体的には、タイヤイの年中行事や祭り・イベントへの参与、タイ・アソシエーション（Tai Association）での学習活動や日常的交流の観察、若者を対象とした半構造化インタビューを実施した。調査では、アソシエーション内部における若者間の関係構築とホスト社会との対外的なつながりがどのように形成されるのかという双方の側面に注目した。

以上の問題意識と方法論に基づいて、本稿は以下の構成をもって議論を展開した。

第1章では、「タイヤイ」「シャン」「タイ」（Tai）の民族名称をめぐる言説について整理し、ラーンナー王国期から、英領ビルマ期、戦後ビルマの政治・経済的混乱期、タイ国の高度成長期を経て、現代に至る移住の歴史の変遷を分析した。国境画定以前の国家を意識しない往来や、政治・経済的要因に影響されながら形成された長期的な移住の流れを経て、現代の外国人労働者を取り巻く法制度のもとでミャンマー人労働者として再編成される構造的プロセスを明らかにした。その上で、研究対象であるタイヤイの若者たちが単なる現代社会における移民ではなく、こうした長い移住史の延長線上に位置づけられる存在であることを示した。

第2章では、チェンマイに暮らすタイヤイの若者がタイ国内でどのような法的身分を有し、その身分に基づくさまざまな制約のもとで、どのように将来を設計し自己形成を行っているのかを検討した。ミャンマー人労働者として扱われる若者が正規就労を目指して多様な方略を講じる姿、幼少期からタイ社会で育った若者が言語能力や生活知を活かして小規模ビジネスを展開する姿、そしてミャンマーでの生活歴が長い若者が高等教育に進学しながら学習経験を積み重ねていく姿を描き出した。また、ホスト社会における「勤労者」や「不良少年」といったイメージを分析し、チェンマイにおけるタイヤイの若者が民族的同質性を前提としない存在であることを指摘した。

第3章では、チェンマイという都市の特徴、若者の移住経路、そして都市経験の実態を検討した。分析はシャン州、タイ国北部の国境地域、チェンマイの都市部の順に行った。これにより、旧市街を中心に北側に広がる宗教実践、居住、経済活動を基盤とするパーバオ寺院およびクータオ寺院周辺の従来のタイヤイの生活圏と、近年旧市街西側に新たに形成されつつあるスワンドーク寺院周辺の学習空間が、タイヤイの若者にとって主要な活動拠点となっていることが明らかになった。また、移住背景の異なる若者の事例をもとに、各々がチェンマイという都市をど

のように経験するかを考察し、チェンマイが若者にとってシャン州との文化的連続性を感じながら生活できる場であると同時に、都市の教育・消費資源を活用して新たなキャリアを形成する場であることを指摘した。

第4章では、チェンマイで行われる見習僧の出家式、タイヤイ新年祭、タイヤイフェスを取り上げ、これらの祭り・イベントがシャン州で行われている伝統の単なる再現にとどまらず、参加を通じて一時的な共同性を生み出す場であることを指摘した。まず、見習僧の出家式はランナー地域の仏教文化に共通する儀礼であることからホスト社会に受け入れられやすく、祭りを通じてタイヤイの若者はチェンマイという都市で生きる仏教徒として自己を位置づけ直していた。一方、タイヤイ新年祭は、シャン・ナショナリズムに基づくシャンとしての共同性が強調されるものであったが、同時に、その共同性の強調ゆえに、多様な背景を持つタイ国内のタイヤイの若者間に潜在する差異が部分的に顕在化する場でもあった。さらに、タイヤイフェスはホスト社会が用意する商業イベントとして、都市的な消費文化やポピュラー音楽を体験する場となり、若者にとって都市生活の文化的経験を積む機会ともなっていた。

第5章では、チェンマイでタイヤイの若者が中心となって活動する都市のアソシエーションを事例とし、日常的な実践を通じて彼らの共同性がどのように生み出されるのかを明らかにした。本章で中心的に取り上げたタイ・アソシエーションでは、日常的な交流を通じて築かれた相互補完的な関係が、若者の間に潜在する差異を解消・再解釈する基盤となっていた。特に移民1.5世代や第2世代の若者にとっては、アソシエーションの活動の一環として行われるシャン語学習の場が、自身の文化的ルーツと再接続する重要な実践であることが明らかになった。一方、伝統舞踊公演といった対外的活動は、ホスト社会からの依頼に基づいて成立し、チェンマイの公共の場で舞踊を披露する経験が、若者たちのタイヤイとしての自己認識を再構築する契機となることを示した。

第6章では、これまでの議論を踏まえ、都市におけるタイヤイの若者の共同性がどのように生み出されるかを総合的に検討した。その結果、都市で生成される共同性は固定的な同質性ではなく、内部の多様性を認めながら相互の関与を通じて再編され、さらにホスト社会との相互作用によって、都市の公共の場で集団として具体的に示されることで、社会的に認知されることが明らかになった。こうした共同性は、チェンマイという都市が持つ構造的リミナリティと、タイヤイの若者が抱える社会的リミナリティという2層のリミナルな状況のもとで行われる実践によって生み出されることを指摘した。このような都市と移民が抱えるリミナリティのもとで、祭りやイベントは一時的で固定的にも見える共同性を生み出し、アソシエーションは差異を内包した流動的な共同性を生み出すのである。とりわけ今日のチェンマイでは、タイ・アソシエーションが制度的基盤と宗教的承認を背景に活動し、後者の共同性の生成に重要な役割を果たしていることを示し、その意義をもって本稿の結論とした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (朴 苑 善)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	村上 忠良
	副 査	教授	宮脇 聡史
	副 査	准教授	池田 一人
	副 査	准教授	日向 伸介
	副 査	教授 (京都大学)	片岡 樹

論文審査の結果の要旨

本論文は、ミャンマーからタイ国北部に移住してきたタイヤイ移民とその子弟が、移住先でタイヤイとしての共同性を生み出すプロセスを分析した民族誌的研究である。ここでの「タイヤイ」とは、東南アジア大陸部内陸山地から西南中国にかけて分布するタイ系民族で、主としてミャンマー連邦共和国のシャン州を中心に居住するグループを指す。本論文の研究対象は、ミャンマーのシャン州から1990年代以降にタイ国に移住してきたタイヤイ移民とタイ国内で生まれ育ったタイヤイ移民の子弟で、タイ国北部の中心都市であるチェンマイで生活する10代後半から30代までの「若者」である。彼ら／彼女らは、タイ国への移住の過程、法的身分、生まれや育った環境の相違によって多様な背景を有している。本論文は、民族的属性や地縁に基づく固定的なアイデンティティを所与のものとし、彼ら／彼女らを移民コミュニティとして単純に記述するのではなく、チェンマイで生活する若者たちが、イベントや祭り、アソシエーションへの参加という実践を通じて、都市環境の中でタイヤイとしての共同性を主体的に作り上げていく姿を記述し、分析したものである。

研究方法としては、タイ北部へのタイヤイの移住の歴史や、移民としての法的・社会的な位置づけ、さらにチェンマイで行われる年中行事や教育・学習活動に関する文献調査により、調査対象の社会的・文化的文脈を把握した。その上で、2022年から2024年にかけて約1年3か月間、チェンマイ市に滞在し、タイヤイの若者を対象として、彼ら／彼女らの活動への参与観察とインタビュー調査を行った。本論文は以上の文献調査とフィールドワークで得られた資料を基に執筆されている。

序章では、タイ北部におけるタイヤイ移民に関する人類学の先行研究のレビューから、移民第1世代のタイ国での社会的適応のプロセス、移住先でのイベントや祭りにおけるタイヤイとしてのつながりの生成、第2世代の社会的不安定さや文化的ハイブリディティが主として議論されてきたが、第1世代、第2世代という世代論を超えた多様な背景を有する「若者」の活動の重要性を論じている。さらに移住先で生成されるタイヤイの共同性を、固定的な民族的属性を有する移民のコミュニティとしてではなく、移住先での個々人の経験を通して、その社会的文脈の中で生成される流動的なものとして捉える視点から、祭りやイベント、アソシエーションへの参加を通して若者同士の相互作用と、それを取り巻くホスト社会との関係性の考察から新たに生み出される共同性を分析するという、従来の先行研究を乗り越えるための研究主題が提示されている。

第1章では、ラーンナー王国期から、英領ビルマ期、戦後ビルマの政治・経済的混乱期、タイ国の高度成長期を経て、現代に至る移住の歴史的変遷を記述している。国境画定以前の人の往来や、国境確定後の政治・経済的要因による移住の歴史を経て、1990年代以降のタイ国の非熟練外国人労働者受け入れへの政策転換のもとでミャンマー人労働者として再編成されるプロセスを明らかにした。研究対象であるタイヤイの若者たちを、こうした長い移住史の延長線上に位置づけて論じる視点と同時に、チェンマイ社会自体がこのような移住史の中で形成されてきたという視点を併せて提示している点が評価できる。

第2章では、本論文の研究対象であるチェンマイに暮らすタイヤイの若者について、タイ国内での法的身分、その身分に基づくさまざまな制約、その制約の下での自己形成や将来設計を取り上げ、彼ら／彼女らの現状を分析している。フィールドワークで得られたタイヤイの若者の事例を紹介し、タイヤイの若者の内実の多様性を描くとともに、ホスト社会から与えられる「勤労者」や「不良少年」といったイメージも併せて分析し、外部からの眼差しが若者に与える影響を検討した。

第3章では、タイヤイの若者の経験をかたちづくるタイ国北部とその中心都市であるチェンマイがもつ特徴、都市への移住による生活環境の変化、都市の中での活動を通して、タイヤイの若者の都市の経験の実態を検討した。タイヤイの若者にとって、チェンマイという都市が教育資源や消費文化を提供し新たな自己形成やキャリア形成を可能にする場であること、またタイヤイの移住の長い歴史、移住者人口の増大によって異郷の地でありながらも、シャン州との文化的連続性を感じながら生活できるリミナルな（境界的な）空間であることを文献とフィールドワークで得られた資料を使って記述している。

第4章では、チェンマイに暮らすタイヤイの若者が参加する「見習僧の出家式」、「タイヤイ新年祭」、「タイヤイフェス」を取り上げ、これらの祭り・イベントが移住元のシャン州での伝統行事の単なる再現ではなく、移住先のチェンマイでタイヤイ同士が一時的な共同性を共有するプロセスを明らかにした。伝統的な仏教儀礼、シャン・ナショナリズムに基づく行事、若者をターゲットとした消費文化やポピュラーカルチャーを体験するイベントという3つの祭り・イベントの特徴を分析することで、これらが単純に同様の共同性を再生産しているのではなく、それぞれの機会ごとに異なった共同性が生み出される機序を明らかにすることができた点は高く評価することができる。

上述の一時的な共同性を共有する祭り・イベントと対比して、第5章では、チェンマイでタイヤイの若者が中心となって活動するアソシエーションの活動を事例とし、日常的で継続的な実践を通じて彼らの共同性が生み出されるプロセスを明らかにした。本論文では、マーハーチュラーロンコーン仏教大学を拠点とする「タイ・アソシエーション」の活動を中心的に取り上げ、学習活動やボランティア・余暇活動の内部で形成される相互補完的な関係性、タイヤイの文化的ルーツとの再接続、さらに対外的な活動によるホスト社会との接点を分析し、タイヤイの若者それぞれが有する経験や情報の差異を互いに学び合うことで、その差異が調整され、参加者の意識が修正されていることを明らかにした。このような移民によるアソシエーションの活動が移住先で新たな共同性を生み出す過程への着目と分析は、タイ国北部のタイヤイだけではなく、他の地域の移民の共同性の研究にも適用できる可能性がある」と評価する。

第6章では、これまでの議論を踏まえ、都市におけるタイヤイの若者の共同性の生成過程についての分析を行った。タイヤイ移民がチェンマイという都市で生成する共同性は固定的で同質なものではなく、内部の多様性を認めながら相互の関与を通じて再編される一方で、対外的にはホスト社会との相互作用を通して都市の公共の場で具体的に示されることで、ホスト社会に認知されていくことを明らかにした。チェンマイという都市が持つ構造的リミナリティと、タイヤイの若者が抱える社会的リミナリティという2層のリミナルな状況のもとで、祭りやイベントは限られた時空間の中で一時的な共同性を生み出し、日常の実践としてのアソシエーションは差異を内包した流動的な共同性を生み出していることを対比的に提示している。またアソシエーションについては、自発性にもとづいた組織であるため、常に不安定を伴うが、本論文で取り上げたチェンマイの「タイ・アソシエーション」は仏教大学の僧侶学生が中心となっているため、タイ国内での制度的基盤と宗教的承認を背景に安定的に活動を継続することができ、チェンマイの若者の共同性の生成に重要な役割を果たしていることも指摘している。

本論文の総合的評価であるが、事例の提示の点でもっと「厚い記述」が可能であったと思わせる点はあるものの、先行研究の限界を乗り越える観点を提示し、それに基づいてフィールドワークで得られた資料を分析した民族誌研究として、また移民のアイデンティティの形成にとって自己形成やキャリア形成の途上にある「若者」の活動の重要性を指摘した点で、学術的貢献度が高いと審査委員会は評価した。また申請者が、本論文の研究成果を学制的基盤として、さらに自己の研究を深化させていくことができると評価している。

以上のことから、審査委員会は博士の学位を授与するに値する論文であるという意見で一致した。